

# 第1部 キリスト教社会問題研究

司会 同志社大学人文科学研究所助教 林 葉 子

**司会** 第1部「キリスト教社会問題研究」を始めさせていただきます。第1部では、「CS（キリスト教社会問題研究会）と共に32年」と題しまして、元同志社大学神学部教授の本井康博先生にご講演いただきます。そのご講演を受けて、同志社大学社会学部教授・吉田亮先生から、コメントをいただきます。本井先生は、新島襄研究を中心に、同志社大学の歴史の根幹をなす重要な史実についての学術研究を積み重ねてこられました。また、NHK大河ドラマ「八重の桜」の時代考証も務められました。それでは本井先生、お願いします。

## CS（キリスト教社会問題研究会）と共に32年 ——CSよ、『同志社の顔』を目指せ——

元同志社大学神学部教授 本 井 康 博

### 1 CS 60年の歩みと現状

#### ふたりの「産みの親」

皆さま、こんにちは。お世話になった先生方や遠方からの懐かしい方のお顔が見られますので、なんだか同窓会気分です。で、ちょっぴり郷愁に誘われて、センチメンタル・ジャーニーを織り交ぜての発表になりますが、しばらくおつき合ください。

本日は第1部のスピーカーとして、同志社大学人文科学研究所（人文研）の過去、現在、将来をめぐってCSの立場からお話しします。まずCSとはですが、CはChristianity（キリスト教）、SはSociety（社会）の頭文字です。この両方をめぐる諸問題を検討、分析する研究会の英語名が、“The Study of Christianity and Social Problem”ですので、略してCSと愛称します。日本語の「キリスト教社会問題研究会」ではちょっと長すぎますので。

このCSは、人文研のいくつもの研究会の中では、中核を占めてきました。『熊本バンド研究』、『山室軍平の研究』、『アメリカン・ボード宣教師』を始めとする数々の業績は、学内はもとより日本プロテスタント史学界でも定評を得ております。

つい最近も、CSの機関誌『キリスト教社会問題研究』が、本学が発行する約50種の全機関誌（紀要）の中で唯一、EBSCO社が運営するEBSCOhostのフルテキストデータベース、“Humanities Source Ultimate”に掲載されることが決まりました。

私がおりました神学部の機関誌、『<sup>キリスト</sup>基督教研究』などは、もうすぐ創刊100年を迎えようかという学界・学内屈指の老舗雑誌です。それを出し抜いてCS紀要が唯一点、同志社を代表する学術誌に選ばれたのですから、これは学内ギネスものです。CSは機関誌刊行の面でも、いわば「同志社の顔」であることが外からも証明、評価されたことになります。

CSが人文研の研究会になって今年はちょうど60年という節目の年です。ですが、最初から人文研所属の研究会であったわけではなく、もともとは、人文研が誕生（1944年）してから11年後

の1955年に、人文研とは無関係に学内有志が自発的に結成した研究会でした。

私は人文研よりも2年早く生まれていますので、いうならば同世代です。ですが、CSの方がなんとなく身近な存在です。なぜかと言いますと、CSの誕生は私が同志社中学校に入った時からです。

### 住谷悦治と竹中正夫

たとえば、住谷悦治先生。経済学部教授（その後、同志社総長）で、CS誕生のキーパーソンです。まさに産みの親です。CSは誕生4年後の1959年1月に人文研と合併し、第2研究班となりますが、その時の代表も住谷先生です。

ちなみに私は神学部の出身ではなく、学生時代は経済学です。大学院（経済学研究科）では住谷先生に指導教授になってもらってCS関連（さしあたっては新島襄やら同志社史）の指導を受けなかったのですが、あいにく（！）同志社総長に在任中でしたから、叶いませんでした。いまだに残念です。

ですが、CSにとっては、総長になるべき人物、あるいは現役総長が代表であることが、学内の信頼や評価を得るうえで何ものにも代えがたい重みとなったことは、確かでしょうね。

住谷先生のほかにいまひとり重要な創立メンバーがいます。若き竹中正夫先生（神学部助教授）です。住谷代表がハード面での「産みの親」なら、竹中先生はソフト面での「産みの親」です。なぜなら、CSが人文研の研究会となった年の7月、ハーバード

大学<sup>えんちん</sup>燕京研究所のE・O・ライシャワー教授（後の駐日アメリカ大使）に掛け合って、研究助成金交付の約束を取りつけたからです。もちろんこれには当時の<sup>おおしもかくいち</sup>大下角一学長が側面から援護したことも大きいです。実はこれには先例（1954年）があります。後述する東京女子大学です。やはりライシャワーと彼の父（A・K・ライシャワー。元在日宣教師）の尽力によります。

CSへの助成金は当初は、3年間の約束でした。が、何度も延長され、最終的には15年間で総額4,445万円が給付されました。現在のようなドル安ではなくて、1ドル360円時代ですから、今ならもちろんナン百億にも上る巨費です。これがCSの書庫（啓明館）をどれほど豊かにしたかは、言うまでもありません。ここにお持ちしたのは、当時の木製看板です。「ハーバード・燕京・同志社・東方文化講座研究室」と墨で書いてありますね。その後のCSの発展、というよりテイクオフの礎はここにあります。

CSが貰った巨額の助成金は、日本の古書籍の値を釣り上げた、と言われたりしました。ある研究者はこう慨嘆しました。「自分など1冊買うだけでも散々、躊躇・思案せざるをえないのに、同志社はまるでショベルカーで買い漁る」と。「棚ごと買われた」とも酷評されました。今風に言えば、「爆買い」ですね。

スコープ一本で手作業している研究者からすれば、同志社の機械力は、羨望を通り越してまさに脅威そのものだったようです。

いまひとつ、この年（1959年）のトピックとしてつけ加えておきたいのは、10月に『キリスト教社会問題研究』3号が発行されたことです。2号までは有志の研究会でしたが、3号からは人文

研から発行され始め、現在に至っております。幸いにも私は記念すべき3号を持っておりますので、今日持ってまいりました。

### 「育ての親」・杉井六郎

人文研に加わって以後のCSですが、本格的な学際・共同研究を始動させます。最初の研究テーマは、草創期の同志社を彩った「熊本バンド」です。これをテーマとして、1960年12月には最初の公開講演会が、同志社創立90周年記念として学内で開催されました。

これは、私が同志社高校3年の時です。発表者の中に、杉井六郎と辻橋三郎の両先生が混じっていました。二人とも同志社高校の教員です。前者からはちょうど日本史を習っていました。後者は古典を教わった教師というよりも、高2の時のクラス担任です。当時、宗教部というサークルに入っていた級友二人から「杉井センセと辻橋センセが、大学で講演しやはるさかいに行こ」と誘われました。しかし、「なにそれ？」の世界でした。

熊本バンドを人名やら音楽バンドと取り違えるほどの無知な私でしたから、聴きに行きませんでした。CSとの初顔合わせは、こうしてすれ違いに終わりました。

その後、大学、大学院と進むにつれて「熊本バンド」の重要性と関心が高まってきました。とりわけ大学二回生の時に同志社教会で受洗したことが決定的となって、関心を寄せ始めました。以来、私なりに追っかけ始め、ついには私の研究テーマのひとつにもなりました。高校の時に目覚めておれば、CSに接触する機会

はもっと早かったのに、と悔やまれます。

ちなみに、後年に『キリスト教社会問題研究』4号（1961年）を見ますと、熊本バンドの特集号として杉井六郎「熊本洋学校」、辻橋三郎「奉教趣意書について」等が収録されています。おそらく前年の講演題と思われます。

高校の恩師、杉井先生はその数年後、1965年（私の学部生時代）に高校を去り、専任研究員として人文研に迎えられました。仲村研先生（地域史）につぐ二人目の専任です。以後、CSの快進撃が始まります。ちなみに辻橋先生は、神戸女学院大学に移籍し、国文学教授になりますので、CSとの関係は薄くなります。

## CSの快進撃

杉井教授は1989年の定年退職まで在籍すること25年、CSを「人文研の顔」とするのに貢献しました。まさに「育ての親」です。その善き例が杉井研究員の入所を契機に、CSが第二研究会から第一研究会に格上げされたことです。それまでの第一研究は、地域研究、なかでも京都の地場産業の研究が主流でした。

その先輩研究会の座をいきなり奪い取ったのがCSで、以後今日に至るまで第一研究はCSの「指定席」です。定位置を確保しただけでなく、研究会の数も一挙に拡張しました。内部はさらに細分化され、通常は四つ（A班～D班）、時には五つ（A班～E班）の班構成になります。

そのためには人的保証も必要です。1974年、神学研究科の院生、葛井義憲ふじいさんが研究補助者（任期3年）として杉井研究員の

右腕になります。これが先例となって以後、他の研究会も補助者をつけることが通例となりました。

CSの進撃はさらに続きます。1976年には二人目の専任として田中真人<sup>まさひと</sup>研究員が着任し、ここに杉井、田中、補助者という3人体制が出来上がります。ちなみに田中先生と同時に高久嶺之介<sup>たかく</sup>先生（今日の第2部スピーカーです）も専任研究員として着任し、地域研究班が一段と充実いたします。

重ねて言えば、CSの基盤を築いた点で、杉井先生の功績は不滅です。京大人文研における桑原武夫所長（4女は中学から同志社で、高校では私と同級）の働きに匹敵するかも知れませんね。

先月15日、京大人文研は創立90年を記念して「桑原武夫の世界」セミナーを開催したくらいです。ただ、京大人文研の場合も、近年は日文研（国際日本文化研究センター）の華々しい活動の陰に隠れて、桑原時代の存在感と輝きが薄れていますから、難しい岐路に立たされているのではないのでしょうか。

## ポスト杉井を荷った吉田亮

杉井先生は絶大な功績を残して1989年に定年退職し、CSの第一線から引きます。後任に抜擢されたのが、吉田亮<sup>りょう</sup>研究員です。吉田さんは実はそれ以前、神学研究科の院生であった時（1981年）にCS研究補助者に就いていますから、現在ではCS最古参です。私の発表が終わると、コメンテーターとして登壇予定です。

神学研究科を出てからは、アメリカで留学や牧会の経験を積んで帰国。ですから願ってもないCS専任者（現在は社会学部教授）

です。自称、「CSチルドレン」です。CS経験が活きたという点  
は、第一号の葛井さんの後に続いた室田保夫さん（後に関西学院  
大学教授）や坂口満宏さん（後に京都女子大学教授）、松倉真理  
子さん（現福岡教育大学准教授）といった研究補助者（本学院生）  
にも共通します。

私が最初に吉田さんに会ったのは、たしか1982年4月16日で、  
『七一雑報』<sup>しちいち</sup> 研究班での発表を聴いた時です。当時、私は本学経  
済研究科を出てから、新潟に新設されたキリスト教主義高校で社  
会科教員をしておりましたが、京都の実家に帰ったり、出張で関  
西に来た時には、啓明館の杉井研究室を訪ねては、研究上の悩み  
や愚痴を聞いてもらったり、助言を仰いだりしていました。

訪ねた日が、金曜日なら「CSに出てみないか」との誘いを受  
けて、こっそり（！）出席することもしばしばありました。

そのひとつが『七一雑報』研究会でした。越後で指導者も研究  
仲間も資料もないなか、ひたすら単身シコシコやっていた私に  
っては、まさにカルチャーショックでした。越後には一枚も残  
されていない貴重な資料、日本初の週刊紙（『七一雑報』）を全編  
コピーしたのをメンバー各自が分担して発表し合うという共同研  
究の姿を生で見せつけられた驚きです。まさに手作業（スコップ）  
に対する圧倒的な機械力（ショベルカー）の威力を<sup>ま</sup>目の当たりに  
し、「なにこれっ！こりゃ、勝てんわ」と絶句しました。

## 晴れて囑託研究員に

数年後の1987年、越後を引き揚げて京都に戻り、研究を本格

化させました。ただちに嘱託研究員（社外）にしてもらい、ようやく憧れの正規メンバーとして堂々と（！）CSに参加できるようになりました。

嘱託になると、特典として人文研の書庫に入れます。またまたカルチャーショック（パート2）でした。竜宮城に赴いた浦島太郎が受けた衝撃さながらに、そこは金銀財宝ザックザックの世界でした。ハーバード資金の威力はハンパじゃない、と脱帽せざるをえない宝の山でした。

これを使わない手はない、と私はCS分科会のすべてに参加することにしました。A班からD班まで（E班があるときは、5班すべてに）登録しました。今では申請できる研究会の数に上限（2個まで）が設けられましたので、私のような無茶な登録はありません。

気分としては博士課程に社会人入学した院生でした。だから発表はもちろん、資料分担（分析）や執筆、報告、講演といった宿題も<sup>ノルマ</sup>肅々とこなしました。定職をもたないフリーターだったからこそできた「修行」かもしれません。ただ、困ったことがひとつ。どの研究班もすべて金曜の16：40開会が定例でしたから、金曜が4回しかない月は、5番目の研究会はどこかの班とダブルブッキングです。そんな日はやむなく啓明館の2階と4階をハシゴするという「<sup>あらぎょう</sup>荒行」を強いられます。階段を駆け上り<sup>お</sup>下りながら、改めてCSの引力はスゴイな、と思わされました。

## 田中真人

CSでは田中真人教授とは同年代ということもあって、とくに親密な関係が築けました。先生は京大吉田寮OBの元学生運動闘士。社会主義や社会運動の研究者でしたから、「僕はSが専門なので、Cの方は詳しくは知らない。よろしくね」と頼りにされました。研究会の運営委員やら紀要編集委員にも起用され、准専任研究員並みに遇してもらいました。

研究会後は、有志で近くの「ニュー北京」あたりになだれ込むのが常でした。発表の裏話やら<sup>よもやま</sup>話を始め、田中先生の<sup>うんちく</sup>蘊蓄や快談で盛り上がる楽しい二次会でした。時には研究発表以上の収穫がゲットできるので、これにもほぼ毎週欠かさず参加しました。<sup>はた</sup>傍から見れば、まるでCS依存症です。

田中先生が人文研の研究主任の頃など、研究所の将来構想、とりわけ専任研究員のあり方についても私的に相談に預かることもありました。一方、個人的には就活まで気を配ってもらい、社史（同志社社史資料室。現社史資料センター）の仕事に就けたのも、「日本の近代化と同志社」という授業科目（「同志社科目」の前身）の講師陣に加われたのも、先生の配慮からでした。

先生が亡くなられた時、CSの中でもっとも伝統的で中核的な研究班（A班）が消滅の危機に晒されました。引き継ぐ教員がないのです。この非常時に私は<sup>さら</sup>菲才を顧みず手を挙げて研究班「代表」となり、有志を集めて班の断絶をなんとか回避できました。ただ一回の代表就任、それもワンポイント・リリーフは、田中先生への恩返しのみでした。

## 神学部と社史の二刀流

こうしたCSでの修行効果、ならびに社史での勤務経験もあって、2004年には思いがけなくも神学部から「一本釣り」され、いきなり教授に就任しました。

ちょうど神学部が「同志社科目」を立ち上げようとした時で、拠点作りのためにスタッフを求人中でした。友人のひとりが「趣味の新島研究が仕事になったね」と喜んでくれました。

新島研究と言えば、まず社史、ならびにそこを拠点とする新島研究会です。神学部で研究職（定職）を得るまでの10数年は、あちこちの学校や大学で非常勤講師をしながら、社史で嘱託職員（最初は週15時間、最後は常勤嘱託）として働いておりました。

社史が事務室を構えている啓明館1階で、資料の整理やら機関誌の執筆・編集作業、企画展、問い合わせの回答や取材への対応（レファレンス・サービス）、研究会（新島研究会）の運営などの業務（現在の資料調査員の走り）をしました。

神学部への移籍が決まった後も、神学部長から了解をもらってそれまでの社史の業務を社史で継続しました。つまり、神学館4階にあてがわれた研究室はカラのままにして、もっぱら啓明館1階をそのまま仕事場にしておりました。こうして講義と教授会の時だけ、啓明館から神学館に「出勤」するという二刀流生活が、数年間続きました。

社史から完全に足を洗って研究室に引っ越したのは、社史の後任が3人揃った時点のことで、退職4年前でした。

社史残留は、社史の業務を手伝うほかには、啓明館の「地の利」

が決め手でした。1階の社史と3階の人文研、そこが私の研究にとって財宝に満ちた楽園でした。これに対して、CS（日本キリスト教史）の分野に限ると、天下の神学部といえどもその蔵書は見劣りします。初めて学部図書室の書庫（神学館）に入った時の反応は、予想通りでした。「えっ、これで終わり?」。イチローさんなら、言うでしょうね、「感激などあろうはずが、ありません」。

ともあれ、社史と人文研のある啓明館は私の主戦場なんです。CSでは、宣教師文書研究を確立された吉田亮先生がその後、文学部（現在は社会学部）に移籍したのを受けて、2010年に後任の田中智子研究員が着任します。初めての女性専任、しかも学校史の専門家ということで期待も大きかったのですが、2016年に京大に復帰しました。

以後、CS研究員不在という初めて経験する異常事態（つまり停滞期間）がしばらく続きます。ですが、私の周辺でも危機意識は希薄でした。CSへの期待感欠如の現われのようで、寂しかったですね。欠員の穴が埋められたのは、ようやく今春になってからです。林葉子研究員の着任です。この人事により、CSの蘇生ばかりか、新しい風が吹く期待が高まっています。

以上、CS 60年の歩みをざっくりと見渡してみました。それは同時に、個人史と重なり合います。杉井六郎、田中真人、吉田亮といった専任教員を始め、多くの先学、同学から育ててもらった32年でもありました。お手元のレジユメには、その間、私がCSの紀要（13編）や人文研叢書・ブックレット（13編）に寄稿したもの、さらには講演会での講演（5回）のリストをつけておき

ました。

合計すればざっと 32 個にも上ります。平均すると毎年、なんやかんやで必ず一回は CS での「出番」があったことになります。これに研究班での「本業」が加わります。各班での報告や発表が、年に 1 度は回ってきます。最初の 15 年間に於いて勘定してみましたら、平均で年 2.6 回という数字が出ました。

時には 1 年に 4 回発表という年もありました。後半には、合宿も入ってきました。で、32 年間の発表回数を合計すれば、ざっと 7、80 回にはなりましようか。こちらの露出度も相当なものです。

社史の新島研究会と並んで、人文研の CS が私の研究生生活の屋台骨であったことが、ここからも立証できます。

## 2 CS を「同志社の顔」に

### CS への提言

では、過去と現状はこれくらいにして、後半は未来に目を向けてみます。今後の人文研のありようや研究会の展望に関して建設的な提言が多少ともできれば、との願いからです。

「若者は幻を見、老人は夢を見る」（「使徒言行録」2：17）に励まされ、私なりの「夢」を語ってみます。

ちなみに新島襄は、同志社大学設立の大事業を自ら“daydream”（白昼夢）と呼んで（『新島襄全集』6、366 頁）、後半生のすべてをその実現に捧げました。それに比べれば私の提言など、スケール的には極微なんです、が、「夢」である点は同じです。

同志社大学がひとりの人間が懐いた「夢」、しかもとんでもない「白昼夢」(実際のところ、京都と同志社は完全なミスマッチでした!!)から始まったように、どんな構想であれ、誰かが「白昼夢」を見ないことにはけっして実現には至りません。あえて拙論を披瀝する所以です。

### CS 周辺の外的な変貌

まず指摘すべきは、CS の外的環境の激変振りです。人文研研究会の多様化に伴い、CS の存在自体に大きな変化が生じています。地盤沈下です。

かつて CS は人文研研究会の中核で、数的にも全研究会のうち、半分を占めていました。往年の杉井時代、CS は所内でも学内でも主流派で、時に「出る杭は打たれる」状態でした。それが、近年は研究会が 20 近くに激増した結果、CS は埋没状態です。打たれる程の杭も少なくなり、存在感も迫力も欠如してきました。

現に今年度など、17 の部門研究会のうち、CS はわずか 2 つだけ。それも専任研究員の代表は不在で、人文研外部の木原活信先生(社会学部教授)と吉田亮先生(同)がそれぞれ代表として孤軍奮闘中です。数的には 12% 以下、参加者数に至ってはわずか 10% 強に過ぎません。

かつて他部門の研究会リーダー(代表)から「なぜ CS は人がそんなに集まるのですか」と羨望のまなざしで尋ねられたことが、懐かしいです。それが今や、相対的な地位の低下やら埋没が顕著です。これに伴い、学内外での知名度低下は避けられません。CS

の専任研究員が一時、不在となった時も学内でほとんど問題とされず、スルーされたくらいです。

こうした傾向は、部門研究会の立ち上げ条件が緩和されたことに加えて、新学部が8つも増え、全体で14学部体制になったことと無関係ではありません。それにともない、とりわけ社会科学分野の研究会が伸びてきました。

かつて人文研は分野別に3種の紀要を毎年刊行してきましたが、『人文科学』はすでに1991年に休刊され、いまは『キリスト教社会問題研究』と『社会科学』だけです。前者は、類似のタイトルの紀要がほかに見当たりませんが、後者は本学社会学部が出している『評論・社会科学』とタイトルがカブリます。

それに対して皮肉なことに、『人文科学』は類似品が学内には見当たらないにも関わらず、消滅しました。それだけに、「人文研から『人文科学』が抜け落ちたら何が残る？」と突っ込まれそうです。

この調子では、外部から「羊頭狗肉」ではと疑われたり、「人文科学をやらない人文研」と揶揄されたりしないとも限りません。

人文研は、部門研究会の拡大（膨張）に歯止めをかけるために人文研将来計画検討委員会を立ち上げて検討を加えた結果、さる一月に「提言」が公表されました（人文研『研究所報』54）。

今後はCS研究、京都等の地域研究、それに現代社会研究という3分野に重点を置く、という提案です。「あれもこれも」（分散・拡張）から「あれかこれか」（集約・選択）に絞るという軌道修正というか、方針転換です。

## 人文研の将来構想

私も基本的にこの提案、方針に賛成です。が、正直もっと大胆になってもいいんじゃないかと思います。ひとつは仮に3分野に絞ったとしても、研究所の看板と中身に齟齬が生じている状態に変わりがないからです。人文科学以外の分野が今後とも増えそうな勢いですから、呉越同舟とは申しませんが、これまで通り「なんでもあり」が続きます。

それを端的に示すのは、人文研の包容性です。そもそも人文研規定にも、人文研設立の目的は「広く人文及び社会科学にわたって〔中略〕総合研究を行い」とあります。最初から社会科学も含めています。だったら、なぜ研究所の名前を「人文科学」に限定したのか、疑問が沸いてきます。現状では、「文系研究所」、さらには人文研創設期の「同志社研究所」のほうが、むしろ適切です。

これが会社なら、社員や社長は悩むでしょうね。「うちの会社は何を作ってるのか、消費者に伝わってない」ので、社名変更が必要かも、となるところです。要はアピール度の向上です。

CSとして参考とすべきは、東京女子大学の「比較文化研究所」です。CSよりも5年早い1954年6月にハーバード燕京研究所の資金援助により設立された研究所で、日本キリスト教史に関する一次資料もかなり所蔵しています。紀要としては、『比較文化』を出しています。

隅谷三喜男先生が学長・所長の時（1983年）に宣教師文書をベースとする「日本キリスト教史の研究」会が新設され、5名のメンバーが各地から招集されました。私も声をかけられて新潟か

ら数回、杉並の研究会に出席いたしました。が、諸種の事情で研究会は成果を形にして残すまでには至りませんでした（拙著『アメリカン・ボード 200 年』598 頁）。

これを想うと、成果として研究書をきちんと出し続ける CS は優れ物ですね。ひょっとしたら隅谷先生が東京女子大でモデルとされた研究会は CS 方式ではなかったかと勘繰りたくもなります。

ちなみに、隅谷先生は当時、CS に関してこう評されています。

「このようなニーズ〔社会史的方式による日本キリスト教史の分析〕にもっとも積極的に<sup>こた</sup>応えようとしたのは、同志社大学キリスト教社会問題研究会であり、その研究成果は『キリスト教社会問題研究』として〔毎年〕刊行された。それは社会史的方法によるすぐれた成果のほかに、次に述べる思想史的方法〔省略〕をも多数含んでいる。ディシプリンを異にした研究者のグループと見るべきである」（隅谷三喜男『日本プロテスタント史論』176 頁、新教出版社、1983 年）。

## 人文研を分化

そこで以上のケースを勘案したうえでの提案なのですが、同志社の場合、人文研を分割し、思い切って社会科学研究所（社研）を別に設置する案はいかがなものか。京大には人文研はあるものの、社研はありません。東大は逆に社研だけで、人文研は不在です。京大は社研の代わりに経済学研究所を、そして東大は人文研の代わりに東洋文化研究所や資料編纂所を設置しています。

もちろん、人文研と社研を合わせ持つパターン（中央大学や専

修大学等) だってあります。

こうした重点化・特化の考え方に立ちますと、京都等の地域研究などもいっそのこと「京都学」を前面に打ち出すほうが対外的にアピールできそうです。そもそも創設期の人文研は、京友禅や西陣機業などの研究に力を入れていましたから、「京都学」では先陣を切っています。

それがここにきて、京都府立総合資料館に先を越されてしまいました。同館は一昨年、大胆にも「京都府立京都学・歴史館」と改称し、イメチェンを図ろうとしています。そのため改革は名称だけでなく、府内の大学機関と連携して研究者を集め、「京都学共同研究会」なるものも発足させています。本学からも参加者が出ていますから、将来、人文研の強敵になりそうな勢いです。

さらに地元の大学でも、京都伏見の聖母女学院短期大学が「伏見学研究会」を立ち上げ、『伏見学ことはじめ』(1999年)を出しています。したがって、京都学の先駆である本学なら京都学研究所(センター)もあり、と思わずにはおりません。

現代社会研究でもそうです。京都を中心にしたローカルな地域研究に対して、最近ではラテンアメリカ研究を始めとするグローバルな地域研究が人文研でも盛んになってきています。2018年度から研究開発推進機構の中核的研究拠点(研究センター)の1つとして、ラテンアメリカ研究所が発足しました。これなどは、今日の第3部のスピーカー、松久玲子教授(グローバル・スタディーズ研究科)の長年の「夢」の結実と言えましょう。

そうであれば、これまで実績を積んできたCSの独立も夢では

ありません。名前はともかく、同志社大学 CS 研究所とか同志社キリスト教研究所といった独立の機関（機構、センター）を想定したいです。明治学院大学には、すでに「キリスト教研究所」があり、学園史の拠点をも兼ねています。

もちろん同志社では課題も多く、隣接する諸機関・組織、たとえば良心学研究センター（2015年創立）や神学部、キリスト教文化センター、同志社社史資料センター（新島研究会）、その他の諸研究センター群との棲み分け（調整）やら差別化が必要になってきます。

## 啓明館に一本化

私の夢は、さらに膨らみます。人文研の特化や分割だけでなく、同志社独自の研究機関を一か所に集中させ、同志社らしいというか、同志社以外ではやれないような研究に取り組む環境と体制を築けないか。

たとえば、啓明館の1階に社史、2階（かつては国際課、今は施設課の事務室）にCS、3階・4階に人文研、5階に良心学センターといった布陣を構えて、建物全体をまるごと同志社科目の拠点とする。こうすれば、啓明館は同志社の独自性について内外に情報やサービスを発信する巨大な基地となりえる、と思います。

啓明館がそもそも建てられた由来も、それを後押ししてくれるはずです。卒業生の山本唯三郎が、同志社大学設立を記念して大学に相応しい図書館を、と願って寄付した建物です。彼は出身地（現岡山市）にも図書館を寄贈しています。彼の強い思い入れを

感じますね。

こうした寄付者の「夢」と志を尊重するならば、同志社独自の  
研究施設・機関をここに集約・一本化する意味も十分ありえます。

## CSを「人文研の顔」に

啓明館を「占拠」するというハード面と並行して、CSの内面的な充実も図らなければなりません。それはCSが人文研の中核に据えられていた往時を回復することでもあります。

さきほど開会前にいただいたメッセージ集計表では、井上勝也先生（名誉教授）のものが目につきました。「杉井六郎先生の時代が人文研の最も盛んな時期でした。是非もう一度『同志社の人文研』を取り戻してください」とあります。

冒頭で紹介したように、CS機関誌が学内機関誌としては唯一、EBSCO社が運営するEBSCOhostのフルテキストデータベースに選ばれました。外部評価では、CSは「同志社の顔」なんです。<sup>しかい</sup>斯界の最高権威であった隅谷三喜男教授（東大）が、CSをいたく評価されていたことは、前に見ました。

あとは、内部の関係者がそうした評価や期待を裏切らないよう中身の充実に努めることです。小山隆所長（社会学部教授）を始めとする人文研の首脳やスタッフに期待しております。それだけに、本日のトリである小山所長による「人文研将来計画について」の発表は、楽しみです。

しかし問題は、人文研だけで解決するものではありません。

## 執行部の英断に期待

だから、最後は大学執行部への提言です。次期学長予定者の植木朝子副学長は、2019年12月4日の記者会見で次のような抱負や方針を披瀝されています。

まずは、「同志社の伝統と蓄積は点にとどまる。今後は線や面として再構成したい」というのです。「同志社の伝統と蓄積」と言えば、学術面ではCSが好例です。

これまでの業績は、「点」に留まっております。これを他の点とつないで「線」とし、ついで線と結び付けて「面」とする。その集積の一例が、同志社キリスト教研究所であり、啓明館に関係機関を集中させるという「再構成」です。

いまひとつ披露されたのは、「キリスト教の歴史や同志社大学の歴史を学ぶ同志社科目、チャペル・アワー、良心学研究センターのシンポジウム、教職科目の人権教育論など」を充実させて「良心教育の実質化」をはからなければならない、との決意です。ならば、啓明館全体を「良心学教育センター」の名で、先の諸機関を一体化するのも手です。

## 『同志社 150 史』編集・出版こそ CS の出番

提言に合わせて緊急課題をひとつ。同志社創立 150 年（2025 年）を数年後に控えて、すでに『同志社 150 年史』（仮称）の編集・執筆スタッフの布陣が決定し、準備が進められております。事務局は社史に置かれ、事務の主軸は小林丈広センター長（文学部教授）です。第 2 部のコメンテーターとしてこの後、登壇され

ることから分かるように、人文研にも関わりの深い方です。

これに関して思い起されるのは、かつての『同志社百年史』全4巻（1978年）と『新島襄全集』全10巻（1983年～1996年）の編集・出版です。社史の河野仁昭室長とCSの杉井六郎の存在と働きは、絶大なものでした。

もしも、人文研が50年に一度のこの好機を逃せば、今後のCSの出番やら存在価値が極めて不透明になるのは、目に見えて明らかです。つまり、CSがこのチャンスをスルーするならば、今度はCSが学内でスルーされる時代が必ず来ます。「CSなんか無くてもええやん」となりかねません。

それを防ぐためにも、人文研の専任研究員の補充が急務です。定員5人のところ、現在はわずか2人（林田秀樹准教授と林葉子助教）だけです。残る3人中、CS専門家（できればふたり）の採用が望まれます。神学部やキリスト教文化センター、社史にも適任者が不在なだけに緊急の人事です。神学部で言えば、私に続いて原誠教授が今春、定年退職されて以来、日本キリスト教史担当教員は不在のままです。この分野の両巨頭であった竹中正夫教授と土肥昭夫教授（いずれも神学部）がかつてCSで一時代を築くほどの活躍をされたことも「今は昔」です。

専任に加えて、研究補助者（院生）の補充も望まれます。しばらく採用が停止されていたので危惧しておりました。が、先月解除されたようですので、緊急に相応しい人材を確保してほしいですね。初代の葛井さん以来、この方面で有為の研究者や教授を何人も輩出してきてだけに、今後とも活用が望まれます。

## 創立 100 年を見据えた研究投資へ

本学は 21 世紀に入ってから学部造成や大規模建築などのために巨費を投じてきましたが、一段落を告げた第二ステージにおいては、私学の独自性発揮のためにハコモノから教育・研究部門へ資金を逆流させる英断を期待せずにはおれません。

CS が同志社でこそ可能な働きと業績を積み上げて、再び「人文研の顔」、いや「同志社の顔」として光り輝く夢を私は見続けます。そのために執行部はもちろん、人文研スタッフにもエールを送ります。かつて「次は新島センターを」と『同志社時報』95 (1993 年 3 月) で提唱してから、すでに四半世紀が過ぎましたが、まだ夢のままです。CS 研究所もそうなのかもしれません。

四半世紀たてば、人文研は創立 100 年を迎えます。「100 年の大計」に向かってそれぞれが夢を抱き、それに向かって雄々しく前進することを祈ってやみません。

新島襄ならきつと Go, go, go in peace. Be strong. Mysterious hand guide you! と激励してくれるはずです。

**司会** 本井先生、ありがとうございます。私自身が人文研の研究會に最初に参加させていただいたのは大学院生の頃で、そこでの緻密な議論の中心には本井先生が常にいらっしゃいました。他にも、田中真人先生や杉井六郎先生のように素晴らしい先生が数多くいらっしゃいまして、学生時代からそのような共同研究の場に参加できたことは、今ふりかえると、どんなに貴重な経験だったかと思います。書庫には価値ある資料がたくさんあり、私も初

めて書庫に入った時、「これはすごい」と思いました。同志社の先生方はもちろんのこと、学生の皆さんにも広く、そのような素晴らしい場が学内にあることを知っていただき、これまで守り続けられてきたCSの伝統と環境とを若い方たちへと継承し、発展させていくことが必要だと、あらためて思いました。本井先生のお話の中では、これまでCSを支えてこられた重要な方々のうちの一人として、吉田亮先生のご紹介もありました。その吉田先生に、本井先生のご提言を受けてお話しをしていただきます。よろしく申し上げます。

## コメント

同志社大学社会学部教授 吉 田 亮

本井先生、ありがとうございます。CSが誕生して60年以上がたちます。本井先生はその半分の時代に貢献していただいています。心から敬意を表したいと思います。本井先生のような、心からCSを愛しておられる先生方によって、これまでCSは支えられ、研究業績を上げることができてきました。現在も、今後も、ぜひよろしく願いいたします。

私はCSによって育てられました。現在の研究も、CSのおかげであると感じています。「CSチルドレンの」一人として、私の役割は木原先生と林先生と力をあわせてCSが蓄積してきた成果をさらに発展させる、次世代につないでいく立場から、ただいまの本井先生のご提言に対して感想を述べさせていただければと思います。

ます。本井先生が「提言」としてご指摘いただいたことは、CSにとって最重要検討事項というべきものばかりです。このご提言すべてに対して発言させていただくことは難しいので、発言できそうな3点を抽出して感想を述べたいと思います。

1つは「CSの外的な変貌」という言葉で表現されているものと「研究の特化」。さらにそれにかかわる「棲み分けと差別化」という3つについてです。最初に「CSの外的な変貌」です。本井先生のレジュメでは「人文科学研究所の研究会の多様化に伴うCSの外的な変貌」とありますが、これは「CSをめぐるハード面の変化」と理解しています。小山所長のリーダーシップにより、「人文研の提言」に基づき、今後、人文研は3分野に重点化することになりました。ハード面の変更が、CSにとってどういう意味をもつのかを考えてみますと、特に専任研究員をいただけるという点で大変重要だと思います。本井先生からもご指摘のように専任研究員の牽引力は、とても大きい。CSのこれまでの展開を支えてきたといっても言い過ぎではないと思います。専任研究員の専門性が、その時々CS研究のカラーまで影響を及ぼしていきがありました。杉井先生は「日本近代における西洋思想の受容」という視点で。田中真人先生は「日本近現代の社会思想・運動」という視点。私は「日米関係史」。田中智子先生は「高等教育史」という、それぞれの分野を活かしながらCSの守備範囲を広げていただいた流れがあります。現在、専任研究員の林葉子先生は「日英米間のキリスト教矯風運動史」がご専門で後で述べる「トランスナショナル史」の視点を広げていただけるに違いないと大

変、期待しております。

2つ目。本井先生はCS研究を特化させ、「人文研の顔」となる必要性を述べられました。CSにとって「特化」とは何を意味するのでしょうか。研究活動の中身から考えますと、CS自身、広義に「世界に開かれた日本近代史」、狭義に「キリスト教史研究」において、すでに特化している。特化した研究の切り口を、これまで維持してきている。CSの特殊性をさらに際立たせていくことが「特化」ということだと理解しました。

「CSにとっての特殊性」とは何か。それは以下3点であると思っているのは私だけなのでしょうか。最初の2点は、CSが継承してきた「問題意識」と「研究方法」。それは本井先生もいわれたようにCとSの関係を解明していくことと、資料に基づく実証主義的な研究です。3つ目は90年代以降に見られる特徴ですが、「トランスナショナリズム」。この3点ではないかと考えています。「CとSの関係の解明」についてはCSが創設以来、「プロテスタントと社会の関係史、日本近代が生み出してきた社会問題へのキリスト教の対応に関する史的解明」を旨としてきました。それは「同志社プロテスタンティズムが近代日本の形成にどういう関与をしてきたかを、社会問題を手がかりに明らかにしていく」という研究と言い換えることができます。これはハーバード燕京研究所、さらにライシャワーが、同志社に期待したテーマでもあります。そのテーマを半世紀以上、探究し続け、国内外に発信してきました。国内ではこのテーマや研究体制、研究業績において、同類の他の研究機関の追隨を許さない存在感をもっています。海

外でも今回、EBSCO の話が出ましたが、そのように一定の評価を受けるに至っています。これは大事に継承、展開していく必要があることはいうまでもありません。

2つ目は「一次資料に基づく実証主義」と呼んでいました。CS は未踏査の膨大な一次資料を蒐集し、整理し、その分析に依拠した研究を進めてきました。それによって CS の歴史研究への信頼を担保してきたということが出来ます。結果として同志社にしかない資料、同志社系組合教会資料、社会運動史、海外日系教会史、アメリカンボード、その他諸々が人文研に保管されています。今後も、こうした蒐集を続けていく必要があります。

3つ目は「トランスナショナリズム」です。90年代以降、日本国内に研究を限定しないトランスナショナルの研究が付加されてきたことです。そこでは同志社プロテスタンティズムの海外展開、海外への影響、海外のプロテスタンティズムとの相互影響関係の検討がトピックとして上がり、すでに社会事業、アメリカンボード、移民教育、その他においても成果が上がっています。これら3点は今回、20期のCS関連の研究活動で、第1、第2研究会の中でも活かされています。1と2はいうまでもないですが、3番目の「トランスナショナリズム」に関しては第1研究では「日本のキリスト教社会事業における欧米思想の受容」。第2研究では「戦後日本の教育再建におけるアメリカ日系プロテスタントの影響」についての研究の中で活かしていこうとしています。この分野はさらに今後、発展させる必要があります。

3番目に「棲み分け」についてです。「棲み分けと差別化」は確

かに必要であります。人文研 CS の研究内容を見る限り、かなり特化されていまして他の研究機関で代用することはできません。「学内における CS の役割」という点から考えると「良心教育及び研究の実質化」「キリスト教や同志社の歴史を研究・学習」する大きなプロジェクトを設定した場合、CS は他の研究機関と「棲み分け」しながらもプロジェクトに独自の形で貢献することができます。他機関を相補する関係を構築することによって同志社のブランド化に貢献する道があることも考えています。これが今後、検討すべき課題ではないかと思えます。

以上、本井先生のご提言を、一つでも、今後、実現できるように、林先生、木原先生とともに協力しながらがんばっていきたいと思えますので、どうぞみなさま方、今後ともご支援のほどよろしく申し上げます。ありがとうございました。

**司会** 吉田先生、ありがとうございました。広い視野から今後の課題を示していただき、CS の担当者として責任の重さを感じるとともに、吉田先生のお話の背後に、CS に対する深い愛情があることを感じて、そのように大切にされてきた研究会の文化を、今後も多くの人たちと分かち合えるようにしたいと、あらためて思いました。本井先生、吉田先生、ありがとうございました。